

Title	「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」
Author(s)	小松原, 織香
Editor(s)	
Citation	現代生命哲学研究 .3 ,p.1-14
Issue Date	2014-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/13788">http://hdl.handle.net/10466/13788</a>
Rights	

## 「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」

小松原織香\*

### 1. 「私の死の瞬間」としてのトラウマ

モーリス・ブランショの短編小説に「私の死の瞬間」という作品がある。ブランショの自伝的小説であり、ナチスに銃殺される寸前に、偶然のはからいで命が助かった「私」の経験を綴っている。「私は思い出す」という書き出しで、「私」は過去を想起する。目の前でナチスの兵が銃を持って射殺するために並んだとき、「私」は「尋常ならざる軽さの感情、一種の至福（それでも幸福なところは少しもなかった）<sup>1</sup>」を感じたという。それについてブランショは次のように書く。

「この軽さの感情を、彼の代わりに分析するつもりは私にはない。彼はもしかしたら、突然、無敵になったのかもしれない。死んでいて——不死であって。もしかしたら恍惚。むしろ、苦しんでいる人類に対する共苦の感情、不死でも永遠でもないという幸福。このときから、彼は密やかな友愛によって、死に結ばれたのである<sup>2</sup>」

この瞬間が訪れた後、ナチスが場を離れ、ロシア兵によって逃がされた「私」は死を逃れる。そして、この瞬間を次のように書く。

「とどまっていたのだ。それでも。もはや銃殺が待たれるばかりの瞬間に、軽さの感情が。私はそれを言い表しようがないだろう。生からの解放？幸福でもなく不幸でもなく、恐れのない不在でもなく、そしてもしかしたらすでに彼方への一歩。私は知っている、私は想像する。この分析不能な感情が、彼に残っていた実存を変えてしまったのだと。あたかも彼の外の死が、これ以降、彼の内の死にぶつかることしかできないかのように。『私は生きている。いや、おまえは死んでいる』<sup>3</sup>」

ブランショは、死の危機に瀕してその後生き延びたあと、運命を分けたその瞬間を「私の死の瞬間」として描きだす。「私の死の瞬間」が「私」の実存を変

---

\* 大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員（DC）  
電子メール：orika\_k[a]doshisha-u.net

<sup>1</sup> Maurice Blanchot, *L'instant de ma mort*, Fata Morgana, 1994, p.10. (翻訳は次の書籍に収められている。ジャック・デリダ、『滞留』、湯浅博雄監訳、未来社、2000年、5～12ページ。引用該当箇所は8ページ)。

<sup>2</sup> Ibid., pp.10-11. (翻訳、8ページ)。

<sup>3</sup> Ibid., pp.16-17. (翻訳、11ページ)。

えてしまったと、「私」に思い出させ、語らせるのである。最後にこう締めくくる。

「唯一留まっているのは、あの軽さの感情であり、それは死そのものである。あるいは、もっと正確に言えば、これ以降つねに待機中の私の死の瞬間<sup>4</sup>」

この「私の死の瞬間」という作品は、トラウマを負った人間が過去を想起する様子を見事に描いていると言えるだろう。第三者的に見れば、ナチスに捕まったものの、なんとか生き延びた「私」は幸運であったと言える。だが、「私」がこの経験を思い出そうとすると、決定的な瞬間に自分が縛り付けられた形でしか語れない。過去が過去にできないような体験はトラウマと呼ばれる。本来的に「私の死」は証言できない。死んでしまった人間は語るができないからだ。トラウマもまた本来的には、言語化を拒絶するような外傷体験を指すために、語るができないはずだ。そのとき、「私の死」と「トラウマ」を重ね合わせることで、「私の死の瞬間」としてブランショは言語化できないものを詩的に表現しようとする。

ブランショの表現を借りれば、トラウマを負った人とは「私の死の瞬間」を味わってしまった人であり、それに取り憑かれてしまった人だと言える。自分の実存を決定的に変えてしまった瞬間に囚われ、常にそこに回帰しながら自己を捉えている人である。理性的認識では、過去に起きたことはもう終わっているとわかっている。だが、「私の死の瞬間」は私の中で待機中であり、永遠に時間をとめてとどまり続けている。この経験は本来的に誰とも分かち合えない。だが、ブランショのように、詩的な表現によって「私の死の瞬間」がとどまり続けているその場所を指し示すことはできる。トラウマ経験が、何であり、どのように感じたのかを、語りつくすことはできないだろう。だが、ずっと胸の中にあり続けるさまは描けるのだ。

## 2. 物語にできることと、できないこと

アーサー・フランクは、病気や障害を負った人が自己について語ることを三つに分類している。「回復の語り」「混沌の語り」「探求の語り」である。周囲や本人は、最初は病気が治ったり障害を克服したりすることを目指して、「苦しんでいたが、今は元気です」という物語を作ろうとする。だが、実際には病気が治らないこともあるし、障害が生活に苦痛をもたらし続けるということもある。また、次々と襲い掛かる苦難や出口のない絶望によって、うまく語れないことがある。出てくる言葉は支離滅裂で一つの物語の形をとらない。フランクはこの混沌の語りをホロコーストのサバイバーたちの証言を拒否する身振りと同

---

<sup>4</sup> Ibid., P.20. (翻訳、12 ページ)。

て「物語は傷口の縁をなぞり、ただその周囲を語ってまわることしかできない。言葉は痛みの生々しさをほのめかすものの、傷はまさに身体のものとしてあり、その屈辱と不安と喪失感を言葉は決してとらえることができない<sup>5</sup>」と理解する。それは語りえない経験であり、ブランショのいうところの「私の死の瞬間」だろう。フランクは次のように書く。

「混沌の物語の語り手は、まぎれもなく傷ついた物語の語り手である。しかし、本当の混沌を現に生きている人々は言葉によって語るができない。混沌を言語化された物語へ転換するということは、それらを何らかの形で反省的に把握するということである。物語の中で語ることのできる混沌は、すでに距離を置いて位置づけられており、回顧的に反省されている。自分自身の生に対するそうした反省的把握を行おうとする人にとって、距離を取るということは不可欠の条件である。その人の生きた出来事を語る中では、出来事は語りによって媒介される。しかし、現に生きられている混沌においては媒介(mediation)は存在せず、ただ直接性(immediacy)だけがある。身体はその瞬間ごとに満たされない欲求にとらわれている。混沌の語りを生きている人は、自らの生に対して距離をとることも、それを反省的に把握することもできない。生きられている混沌が、反省を、したがってまた物語の語りを不可能にするのである<sup>6</sup>」

以上のように、フランクは物語を作るためには、自己と経験の間に反省するための距離が必要だと言う。反省するというのは、振り返るということであり、現在から過去を俯瞰的に見るということだ。他方、それに対して混沌の語りを生きるというのは、時間の流れが中断してしまい、自己と経験が重なり合ったまま膠着してしまうことだ。これは、ブランショが小説にかいた「私の死の瞬間」が自己の中にとどまり続けるということではないか。ブランショは作品を書くことで、「私の死の瞬間」から距離を取り反省的に書こうとするが、それが自己から分離できないというところで話は終わってしまう。取り戻すことのできないような、自己を変えてしまった瞬間の中にとどまり続けることを、ブランショは書いている。ブランショの作品は、「私の死の瞬間」の内容を語るのではない。「私の死の瞬間」が物語に組み込まれないままとどまっている、その場所を指し示す。

フランクはこうした混沌の語りを、物語の原点に置く。混沌の物語は、混乱や病理とみなされて、整序や治療の対象にされやすい。より整理されたわかりやすい物語への改変が迫られるのだ。だが、フランクはこの混沌の語りへ敬意を払い、承認することが必要だと言う。以下のように書く。

---

<sup>5</sup> Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, University of Chicago Press, 1995, p.98. (アーサー・W.フランク『傷ついた物語の語り手 身体・病い・倫理』、鈴木智之訳、ゆみる出版、2002年、140ページ)。

<sup>6</sup> Ibid., pp.98. (翻訳、140～141ページ)。

「混沌の物語を生きる人々は確かに援助を必要としている。しかし、多くの援助者を自称する者たちがとっさに求めてしまうのは、まず何よりも、語り手をこの種の物語から引きずり出すことであり、そしてそこから引きずり出すことが何とかという名前の『セラピー』と呼ばれるのである。混沌を抜け出すことが望まれてしまう。しかし、ケアをする人間はまず何よりもその混沌の物語の証人であろうとする時、はじめて人を支援することができる。混沌は決して克服されるものではない。しかし、新しい生活が立てられ、新しい物語が語られる以前に、混沌が受け入れられねばならない。混沌の中から姿を見せるさまざまな生をケアしようとする人々は、混沌がいつも物語の背景にあり続け、たえず前掲へと浮かび上がってくることを受け入れなければならない<sup>7)</sup>

フランクは上のように「混沌の語り」を、未成熟で低段階の語りであるとみなすことに対して批判をする。語り手がどんなにまとまりのある物語を語ろうとも、混沌がその傲慢さを暴きだして自らの傷を再認識するような衝撃を与える。混沌が浮上してくるおかげで、語り手は自分の物語が、「私の死の瞬間」を捉えそこなっていることを思い知らされ、自己物語を他人へ押し付けることの傲慢さを回避する手立てを持つことができるのだ。

そしてフランクは可能性としての「探求の語り」を提起する。これは「回想」「宣言」「自己神話」の三つの側面を持つ。回想がもっとも穏やかな形を取り、いま自分を苦しめている瞬間を、別の出来事と結び付けて自分というものを捉えなおす。フランクは以下のように書く。

「回想録においては、出来事は時間の経過にしたがって順に語られるものではないし、細部にいたるまでひとつひとつ再現されるわけでもない。むしろ、現在の状況が、いくつかの過去の出来事が呼び集めるための機会となる<sup>8)</sup>

すなわち、現在の自己にまとまりを持たせるために、過去が振り返られるのだ。それは、過去から現在への流れをまとめた物語ではなく、現在の自分をまとめ上げるために過去を構築する物語である。

「宣言」は社会に対する宣戦布告であり、仲間たちへの呼びかけである。自分の苦しみを宣言することにより、沈黙して我慢することをやめて同じ苦しみを持つ仲間たちと連帯していく。フランクは次のように書く。

「宣言は病が単なる個人的な苦痛ではなく、社会的な問題であることを主張する。宣言は、疾患に伴う身体的問題に社会がどれほど加担してきたのかを証言し、苦しむ者たちの連帯の上に、変化を呼びかける<sup>9)</sup>

上のように「宣言」とは社会的文脈に自分の物語を接続することである。

---

<sup>7)</sup> Ibid., p.110. (翻訳、155～156 ページ)。

<sup>8)</sup> Ibid., p.120. (翻訳、169 ページ)。

<sup>9)</sup> Ibid., p.122. (翻訳、172 ページ)。

「自己神話」について、フランクはメタファーを使い「自らの身体の燃え残った灰の中から再生する不死鳥<sup>10</sup>」と表現する。宣言が社会改革に焦点を当てているのに比べ、自己神話は自己変容に焦点を当てる。困難により自分がギリギリまで追い込まれることを通して、まったく違う自己へ変わってしまうことが語られる。その物語は、人間が苦しみに耐えて、より高みへと向かう英雄の姿として描かれる。このことを、フランクは傷ついた物語の語り手の特権的な力だとしながらも、美化されることに対して警戒もしている。

「自分自身の声はすべて自分自身のものでありうるのだという傲慢に陥ることは、探求の物語に伴うさまざまな破たん危険性のひとつに過ぎない。自己神話は、健康な人々に対して、その書き手が病から立ち直ったように、自分も病を免れることができるのだと思わせてしまうような物語になりやすい。この不死身であるという思い込みに対する解毒剤として働くのは混沌の物語である。混沌の物語は、そこから立ち直ることのできない状況というものがあることを思い起こさせてくれる。さらに重要なのは、探求の物語が病をロマンティックに描いてしまう危険性を伴っていることである。この場合には、回復の物語が解毒剤となる。回復の物語には、理性的な人間のほうが健康を取り戻しやすく、しかも会私たちの多くが健康を維持するためには他者の助けが必要なのだということを思い起こさせてくれる<sup>11</sup>」。

以上のように、フランクは三つの物語が相補的な役割を果たすことを述べている。たとえ、探求の物語により、自分の像をまとめあげ、他者に連帯を呼びかけ、苦しみを乗り越えたように語っても、必ず混沌の物語に回帰してくる。端緒にある「私の死の瞬間」は、探求の物語を通して消えることはなく残り続ける。フランクが描き出そうとするのは、人間が苦しみを乗り越えるために自分の物語を語り他者とつながっていく様子である。そして同時に必ずその根底には「私の死の瞬間」が残り続けるということを強調する。

さて、このフランクの描き出す傷ついた物語の語り手の中心は、病気や障害で苦しんでいる人たちである。だから、自分を苦しめている「自分自身の身体」との関係性を、どう他者に関っていくのが課題となる。ホロコーストのサバイバーなど、暴力を振るわれたトラウマを持つ人々の話もあるが、あくまでも政治状況の中で苦しめられたととらえられている。「ホロコーストの物語もキャンプへの収容の瞬間という明確な歴史的起源を持っていることだろう<sup>12</sup>」というように、具体的な誰かの暴力が混沌を生み出すきっかけとはされていない。むしろ、いま自分を苦しめている起源がどこにあるのかがわからないことを問題化

---

<sup>10</sup> Ibid., p.122. (翻訳、172 ページ)。

<sup>11</sup> Ibid., p.135. (翻訳、188～189 ページ)。

<sup>12</sup> Ibid., p.108. (翻訳、153 ページ)。

する。

しかしながら、ブランショが「私の死の瞬間」で取り上げるのは、具体的にナチスに殺されかけた経験である。銃を向けて自分を殺そうとする具体的な人間がいる。すなわち、対他的な暴力の被害なのだ。ここでは「キャンプの収容」というような政治的な問題ではなく、人を殺すという具体的な暴力の問題がある。すなわち、加害者がいて被害者がいる問題なのだ。この対他暴力の問題を取り上げた時には、「苦しんでいる私」と「社会」という関係の他に、「苦しんでいる私」と「加害者」という関係が問題になる。フランクの議論は、困難の起源に具体的な加害者がいるという場合については触れていない。

### 3. 「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」

具体的な加害者がいる被害者にとって、「私の死の瞬間」を語るときには、常に加害者をどうとらえるのかという問題が浮上してくる。そして「復讐」や「赦し」といった加害者に対する被害者の態度の問題も出てくるのだ。これまでトラウマ研究では、ジュディス・ハーマンをはじめとした暴力の被害者を支援する専門家たちは、加害者の登場しない「探求の物語」を推奨してきた。被害者と加害者の関係に焦点を当てずに、自己像をとりまとめ、社会改革のための連帯を呼びかけ、自己を変容させていくことが、よきサバイバーの人生だと描かれた<sup>13</sup>。だが、フランクが念押しするように、混沌の物語は必ず回帰して、被害者を打ちのめすことになるだろう。混沌の中には加害者が登場し、再び被害者はその人物に直面することになる。

この「被害者が、加害者と再び直面することを受け入れる」ということを、ここでは「赦し」と呼びたい。自分の人生を変えてしまうような加害者と繰り返し出会い続けることを受容するのである。加害者を忘れるわけでもなく、加害者の暴力を正当化することでもない。自分の身に暴力が起き、その「私の死の瞬間」に引き戻されることを受け入れ、加害者が再来する場所が自分の内部にあることを受け入れる。

この赦しは、探求の物語の一バージョンとして起きるかもしれない。加害者が暴力を起こしたことの社会的な背景や、個人史的な背景を知ること、加害者を理解して受け入れようとする営みである。自分に非がないにもかかわらず、暴力を加えた加害者に対して憐みの心を持つ。また加害者が心から反省して謝罪してくることで、相手に対する憎しみの感情が和らぐこともあるかもしれない。その中で、加害者が、自分のここから先の人生を「私の死の瞬間」が到来

---

<sup>13</sup> Judith Lewis Herman. *Trauma and recovery*. Basic books, 1992. (翻訳、ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、1996年) など。

し続けるものに変えてしまったことを赦すのだ。これは「物語としての赦し」である。過去を回想し、周囲に加害者を赦すことを宣言し、自己を変容させることでより高みへ向かおうとする。混沌の物語は何度もまた、「物語としての赦し」を揺さぶってくるだろうし、途中で別の物語に変わるかもしれない。「物語としての赦し」は不変の到達点ではなく、可変的な仮の物語として現れるのだ。それは、赦しを美化するような言説の中で、「回復の物語」として押し付けられ、期待にこたえる形で偽りの物語になることもあるだろう。そのときには、また混沌の物語が浮上して、被害者に「物語の赦し」が擬勢であったことを思い知らせてくれる。「物語としての赦し」は被害者が生きていく中で、何度も完了しては取り消されることがあるだろう。赦しと赦せなさの間を行きつ戻りする、被害者と加害者の物語である。

だが、全く別の赦しの形もあり得る。ここで、ジャック・デリダの赦し論を見てみよう。デリダはインタビューで、「取り返しのつかないことを、人は思い出すことができるのでしょうか。言いがたいことをなお語るすることができるのでしょうか<sup>14</sup>」と問われて、以下のように答えている。

「赦しがあるためには、取り返しのつかないことが思い出され、それが現前し、その傷が開いたままでいることを要します。もし傷が和らぎ、癒合したら、赦しの余地はもはやなくなります。もし記憶が喪や変形を意味するならば、そのときは記憶はそれ自体、すでに忘却になります。このような状況の恐ろしい逆説とは、そのような赦しを与えるためには、たんに加害や犯罪を被害者が思い起こす必要があるだけでなく、そのような喚起が、傷が与えられたときと同じくらいなまなましく傷と痛みを呼び起こすのでなければならないということです<sup>15</sup>」。

上のような「言語化不能な痛みを喚起するとき」とは、フランクの言う混沌と同じものを指すだろう。回復の物語のように、傷が癒されたものとして語られていれば、すでに忘却や記憶の変形が行われている。この混沌の中、誰とも共有できない、胸にとどまり続けている「私の死の瞬間」が再来するときこそ、真の赦しが生まれるのだとデリダは言う。

デリダは 2000 年代以降、繰り返し「理念的な赦し」「純粋な赦し」について言及している。ユダヤーキリスト教的な考えでは、赦しは罪を告白して痛悔したものに与えられる。だが、デリダはそのような赦しは「改悛」と引き換えにするエコノミーを含んでおり、純粋さを失うという。なぜなら、本当の赦しと

---

<sup>14</sup> Jacques Derrida, *Sur parole : Instantanés philosophiques*, Éditions de l'aube, 2005, p.136. (翻訳、ジャック・デリダ『言葉にのって』、林好雄、森本和夫、本間邦雄訳、筑摩書房、2001年、202ページ)。

<sup>15</sup> Ibid., pp.136-137. (翻訳、202ページ)。



は、決して赦し得ないものを赦すことだからだ。後悔して反省した加害者は、すでに悔い改めて罪人ではなくなっている。だから、赦す価値はない。一ミリも反省することなく、暴力を反復し続ける加害者を赦して、初めて純粹の赦しだと言える<sup>16</sup>。

こうしたデリダの「純粹な赦し」の概念は、被害者による加害者への理解や受容を拒む。言語により物語を構築していくこと自体が、拒まれているのだ。この点で、私が先に書いた「物語としての赦し」とデリダの「純粹な赦し」は相いれないことになる。言語化不可能な「私の死の瞬間」を誰とも共有しないことが、「純粹な赦し」の条件となる。しかし、デリダは次のようにも書く。

「赦しのシーンには、必ず証言があり、生き延びの事実があり、心的外傷の経験や暴力の経験を越えてひろがる時間の流れがあります。そして、すでにそのような経験の独異性の中に、加害者と被害者が対面する独異性の中に、第三者の立ち会いがあり、何か共同体のようなものが告げられています<sup>17</sup>」

ここで、上の「純粹な赦し」との矛盾が出てしまう。言語化不可能で共有不可能であるはずなのに、赦すためには証言をしなくてはならず、実行した瞬間に赦しの純粹さは失われるのである。そのため、デリダはこの「純粹な赦し」を理念的なものとして措定し、実践では決して現れないが、論理的にはあり得るものとして定義していく。

デリダの「純粹な赦し」の条件には三つがある。すなわち、「加害者が改悛せず、被害者が癒されていないこと」「トラウマ経験が共有不可能であること」「第三者の立ち会いがあること」である。私はこのデリダの提起した、「純粹な赦し」の概念について、議論を離れて別様にもう一度考えてみたい。

デリダは傷の癒しや相互理解、改悛を条件にした「物語としての赦し」を批判した。「物語としての赦し」は、起きてしまった暴力を社会的な文脈に接続し、被害者と加害者と第三者により共有できる物語として描き出すことで、導き出される赦しである。なぜ暴力が起きてしまったのかを考え、背景や個人的な事情を書き込み、理解していく中で起きていく。加害者は痛悔し、被害者は癒されて憎しみを放棄し、第三者は二度とこのようなことが起きないように誓う。加害者や暴力を容赦するのではなく、暴力の連鎖や反復を断ち切り、自己や社会を変えていくために行われる赦しである。

他方、デリダが三つの条件をつけた赦しを「祝祭としての赦し」と名付けよう。これは第三者の立ち会いがあるにも関わらず、被害者の苦しみは共有されることがなく、傷は癒えない。何度も繰り返される暴力の中で、被害者は残虐

<sup>16</sup> 以下で詳しく論じた。小松原織香「赦しについての哲学的研究——修復的司法の視点から」『現代生命哲学研究』大阪府立大学 21 世紀科学研究機構現代生命哲学研究所、第 1 号、pp.25-45、2012 年。

<sup>17</sup> Ibid., p.139. (翻訳、207 ページ)。

な加害者と対峙することになる。暴力は反復され、第三者はそれに加担し続ける。その状況の中で、被害者の「私の死の瞬間」は繰り返され、もう一度殺されることになる。その死へと漸近して、「私の死の瞬間」が再び到来する中で、「祝祭としての赦し」は姿を見せる。そして、自己も他者も変えることはなく、反復され続けることになる。これは、毎年行われる祝祭のように繰り返される儀式としての赦しである。

この「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」の内実を描くために、被害者と加害者の関係を描いた芸術作品の力を借りたい。次章ではマンガ作品を取り上げて、具体的な二つの赦しの在り様を述べる。

#### 4. 萩尾望都『残酷な神が支配する』で描かれる二つの赦し

萩尾望都『残酷な神が支配する』は父親グレッグから児童性虐待を受けたジェルミと、義理の兄イアンを中心としたトラウマをめぐるマンガ作品である。ジェルミはグレッグを憎むあまり両親を事故に見せかけて殺してしまう。秘密を胸に隠したまま平静を保って生活しようにも、ジェルミの精神は荒廃していき、周囲の人間関係を破壊し、自傷的なセックスや薬物依存に耽溺していく。ジェルミは、恐ろしい怪物のようなグレッグの幻覚にいつも苦しめられ、それから逃れるので必死なのだ。

抵抗のできない少年時代に、もっとも信頼していた大人たち（両親）から性的に侵害され、精神的・肉体的暴力を受けたジェルミの中には、いくつも愛と暴力についての混乱した感情が併存している。「人を殺した自分に愛する資格はない」「愛されることは支配されることだ」「愛が怖い」「セックスには愛情は必要ない」「愛したあと、裏切られたら怒りがコントロールできなくなり、また殺してしまうかもしれない」こうした感情に振り回され、ジェルミは自分を助けようとするイアンを愛することを恐れ、拒絶したかと思えばしがみつくことを繰り返す。

イアンもまた、母親（ジェルミとは別）の自死のトラウマを持ち孤独を抱えて成長した子どもである。イアンは過去にジェルミを見殺しにした罪悪感から弟の支援を始める。しかしながら、ジェルミの混乱した感情に巻き込まれていくうちに、イアンは強烈な愛情と独占欲を抱くようになる。そして、ジェルミが両親を殺害した日が近づくと、いっしょに過去にフラッシュバックを起こしたように入っていく、ジェルミの記憶の世界に「遭難」してしまう。グレッグの怪物のような幻覚はイアンにも襲い掛かってきて、平静を失いジェルミを殺す寸前まで至る。ジェルミもイアンも、お互いに大切にしたいと思い、不幸にたくない願いながらも、暴力的な関係を反復してしまう。

この作品の最終部では二つの赦しが描かれている。一つ目はイアンの赦しである。イアンはグレッグもまた、家庭内不和に苦しんだ家の子どもであり、大人になって暖かな家族を作ろうと目指していたという物語を作り出す。イアンは、両親や自分の子ども時代をよく知る伯母に、自分の想像するグレッグと母親の物語を語る。怪物のようなグレッグもまた、愛の空白を埋めたいと願いながら、混乱した感情を抱えた傷ついた人間であったと理解しようとする。あくまでもそれは自分の作りだした物語だと言いながら、両親の罪を認め、それが過去起きてしまった出来事であることだとまとめる。自分が想像する虚構の物語の中で、イアンはグレッグに再び出会う。そして、理解しようと努め、グレッグを憎むのをやめて受け入れていくのである。

二つ目はジェルミの赦しである。ジェルミは苦しみ続け、毎年、父親殺害の日が来るたびに「遭難」する。そこではグレッグの幻覚が現れてジェルミに暴力をふるい続ける。イアンも過去に巻き込まれ、激しい感情の混乱が巻き起こる。それでも、その日を越えるごとに、ジェルミの精神は落ち着いていき、「過去を思い出すのも辛くなくなってきた」と語るようになる。ジェルミは、決まった時期に「遭難」して、その時にグレッグのことを嫌と言うほどありありと思い出すのがわかっているから、普段は忘れていればいいと思えると言う。「遭難」してフラッシュバックに陥る混乱の中で、ジェルミはイアンに（疑似的ではあるが）殺されて、もう一度生まれてくると感じている。ジェルミは両親を受け入れることもできないし、過去から解放されることもない。しかし、ジェルミはイアンに「遭難」することを楽しみにしていると語る。そして、二人の中では、これは生死を行き来する「冬の祭典<sup>18</sup>」と名付けられた。冬の祭典の中でジェルミは一度死に、再生すると感じているのだ。

前者のイアンの赦しは、「物語としての赦し」だと言えるだろう。宙づりにされた「私の死の瞬間」を証言として物語る。虚構により補われた過去の出来事をつなぎ合わせ、現在の自分を作り上げた要素とする。物語が事実であるかどうかは問題ではなく、イアンがそんな風に両親を思い出すことが重要なのである。トラウマとなった出来事は「私」の個人史の中に位置づけられ、語りえるものとなり、他者に開かれた共有可能な経験となっていく。そして、加害者に振るわれた暴力の連鎖を否定し、自分が断ち切っていくことを胸に誓う。これは、フランクが「不死鳥」のメタファーで呼んだ自己神話の物語だと言えるだ

---

<sup>18</sup> この言葉は、ストラヴィンスキーが作曲、ニジンスキーが振付したバレエ「春の祭典」からとっていると推測される。「春の祭典」は生贄にされる処女を取り囲む群舞である。また、萩尾は2008年11月2日に高知でおこなわれた「まんさい こうちまんがフェスティバル2008」で、『残酷な神が支配する』のタイトルは「春の祭典」と迷っていたことを語ったことが、個人のウェブログで記録されている。（「まんさいでの萩尾望都のまとめ3/4」『アキバくんと美人妻』<http://beauty-and-akiba.cocolog-nifty.com/blog/2009/02/3-e45d.html>、2014年3月5日確認）。

ろう。イアンの物語は、探求の物語であり、そのまま回復の物語にもスライドしていく。ここから先、イアンはまた混沌の世界に戻り、加害者と直面するかもしれないし、「物語としての赦し」は揺らいで、擬勢であったと退けられるかもしれない。だが、仮の物語として赦しは機能し、イアンに達成感と安寧をもたらす。

後者のジェルミの赦しは、「祝祭としての赦し」である。「私の死の瞬間」は必ず回帰するものとして受け入れられ、ジェルミの心はまざまざと痛みと苦しみを与えられる。感情の混乱を再体験する中で、ジェルミはもう一度、加害者と取っ組み合って殺される瞬間を味わうことになる。再生するためには、一度死ななければならない。だから、ジェルミは加害者のもたらす死に漸近するのである。その死から、再び生を選びなおすことでジェルミはこの世界にもう一度迎え入れられる。それは、自分の中に待機している「私の死の瞬間」を解放することであり、宙づりにされたものを引きずりおろして飼いならそうとする儀式である。イアンはジェルミの「私の死の瞬間」を共有することはできず、加害役を与えられそれを演じるだけである。イアンにはジェルミの苦しみはわからないが、儀式に参加することで「私の死の瞬間」の再現に立ち会うことになる。その中で、「祝祭としての赦し」は現れている。

デリダを援用した「祝祭としての赦し」には「加害者が改悛せず、被害者が癒されていないこと」「トラウマ経験が共有不可能であること」「第三者の立ち会いがあること」という三つの条件があった。グレッグは死んでおり、幻覚の中でもまったく改悛することはない。ジェルミの傷は癒えていない。イアンはジェルミの経験を共有しようとするが、うまくいっていない。そして、グレッグと同一化し、暴力に加担するかたちでジェルミに立ち会っている。この混乱した状況は、暴力の再演であり、赦しとは程遠いように見えるかもしれない。だが、ジェルミはこうして「私に死の瞬間」に立ち返り、グレッグと直面して殺され、その中で生を選ぶことで生き延びている。ジェルミの味わう暴力は終わらないし、憎しみはなくなる。それでもグレッグの幻覚もろとも生きていくことを、ジェルミは選ぶ。それが、「祝祭としての赦し」であり、反復される暴力の中で生きることを選ぶことである。

「祝祭としての赦し」は個人に閉じられた、内面的に生きられる赦しの経験である。「物語としての赦し」は、他人と苦しみを共有し、問題のありかを指し示し、社会を変えていく原動力になるかもしれない。だが、「祝祭としての赦し」は陰惨な暴力を肯定し、自分の内部に封じ込めていく。第三者はその儀式に参加することはできても、役割を果たすにすぎず、関与することはできない。「祝祭としての赦し」で被害者は生贄であり、第三者は祭祀である。

その赦しに何の意味があるのか作品では語られない。だが、ブランショが「私

の死の瞬間」を「苦しんでいる人類への共苦の感情<sup>19</sup>」と呼んだことを思い出そう。ジェルミが「私の死の瞬間」を反復しながら生きるさまは、すべての人類が反復する苦しみを体現しているように見える。救いのない被害者の人生をジェルミは引き受け、その身をもって指し示す。また、ブランショは「私の死の瞬間」とは「死んでいて——不死であって<sup>20</sup>」という状態であり、「不死でも永遠でもないという幸福。このときから彼は密やかな友愛によって死に結ばれたのである<sup>21</sup>」と書く。ジェルミが繰り返しグレッグに殺されるさまは、人類が繰り返し殺されるさまだ。だが、ジェルミは再生し生き続ける。終わらない暴力の中を、ジェルミも人類も生きている。その姿を可視化して私たちに見せてくれるのが「祝祭としての赦し」の意味だ。それは他人に推奨することでもなければ、善行でもない。非合理的で前近代的で反社会的な行為である。それでもジェルミは冬の祭典を繰り返しながら、未来に向かって生きていくのである。

このマンガ作品では二つの赦しは並行して描かれていく。どちらかの赦しが優れているというわけでもない。イアンは、暴力の物語を終わらせるために赦しながら、ジェルミの反復される暴力の経験に巻き込まれ、反復される儀式としての赦しに参加し続ける。この作品では「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」が、デリダが議論したような概念的な問題ではなく、過去を抱えて生きる人間の在り様として提示されている。もちろん、このマンガ作品は虚構であり物語の一つだ。現実には二つの赦しがあって、両者が別々のものとして行われているわけではない。しかしながら、理念型としてまったく異なる赦しがあることを見せてくれる。

## 5. 「物語としての赦し」と「祝祭としての赦し」

トラウマとなるような大きな災厄を生き延びた人たちは、その後の人生を生きる中で、繰り返し「私の死の瞬間」であるようなトラウマティックな出来事に引き戻される。そのような出来事を起こした直接の加害者の問題を、どう扱うのかというのは大きな問いだ。従来の議論では、「被害者には、加害者を赦せるのか」という問いが設定されることが多かった。そのとき想定される赦しとは、加害者を責める権利を放棄し、怒りを捨てるという行為であることが多かった<sup>22</sup>。理性による憎しみのコントロールである。しかし本稿では、被害者の災

<sup>19</sup> Ibid., p.11. (翻訳、8 ページ)。

<sup>20</sup> Ibid., p.11. (翻訳、8 ページ)。

<sup>21</sup> Ibid., p.11. (翻訳、8 ページ)。

<sup>22</sup> 80 年代以降、英語圏では赦し研究が盛んになり始めた。理性による怒りの感情のコントロールとして赦しを論じたものの代表例としては、ノースの以下の論文が挙げられる。Joanna North. "The 'ideal' of forgiveness: A philosopher's exploration." 1998.

厄後の人生をどう考えるのかという視点を持ち、「被害者が、加害者の関係について再考するプロセス」として赦しを捉えている。その場合、まとまりを持った物語を作り精神の安定をもたらすという「物語としての赦し」と、反復する暴力を生きるという「祝祭としての赦し」との二つの理念型が導き出されたのだ。

「物語としての赦し」とは、暴力の被害者が現在の自分を取りまとめるために、加害者の起こした出来事を受け入れるような赦しである。「今の自分は、あの出来事なしにはありえない」ということを認めながら、加害者を免罪することはなくても、過去を乗り越えていこうとする行為である。「祝祭としての赦し」とは、被害者が周期的に「私の死の瞬間」に引き戻され、加害者から受けた暴力を反復し殺されていく苦しみの中で、もう一度生を選びなおす儀式のような赦しである。終わらない暴力の中を生きることで、人類の苦しみを体現するような行為である。

このような二つの理念型を導き出した時、前者の赦しはともかく、後者の赦しは倫理的に肯定すべき赦しなのだろうか。「祝祭としての赦し」は暴力を否定しないし、それを生み出す社会も変えることはない。傷つけられたものを助けもしない。だが、人間は古来より、こうした反復する暴力を可視化するような、赦しの儀式を世界各地で行ってきたのではないだろうか。キリスト教のイエスの復活のエピソードはもちろんのこと、小さな村や集落で行われた伝統行事や神話の中に、「死の中からの再生」のモチーフは散見される。人間は暴力が起きた後に、儀式を行うことで暴力と再生を反復し、記憶を蘇らせて伝承しながら未来へ進むという赦しの営みをずっと行ってきたのかもしれない。しかし、「祝祭としての赦し」では、共同体の中で「誰か」が生贄を担うことになる。それは、「誰か」を犠牲にして未来へ進むということなのだ。そのことは倫理的に問題がある<sup>23</sup>。

だが、人間のこうした営みを実際に行うかどうかは別にせよ、描き出すことが芸術作品にはできるだろう。その例が、私が上で挙げたマンガ作品だと考えられる。これまで生贄を担わされて犠牲にされた人々や、暴力を肯定する側面という倫理的問題については、さらに考察を深めなくてはならない。それと同時に、「祝祭としての赦し」が共同体においてどのように機能してきたのかについて、分析を進める必要があるだろう。その先に、被害者が赦すという行為に

---

<sup>23</sup>『残酷な神が支配する』でも、ジェルミが物語の前半で家族を守るために性虐待に耐えることを「生贄」と表現している。また、周囲もグレッグからジェルミへの暴力を知りながらも、生贄として差し出していたことが描かれる。私の解釈を基にすれば、家族を守るための生贄だったジェルミは、苦しみ続けることで今度は読者ひいては人類のための生贄になっているとも言える。しかし、あくまでもジェルミは創作物の登場人物であり、実在する人間が犠牲になる事態とは分けて考えられるだろう。

ついて、私たちがどう向き合えばよいのかが見えてくるだろう。

#### 【外国語文献】

- Blanchot, Maurice, *L'instant de ma mort*, Fata Morgana, 1994. (翻訳、ジャック・デリダ、『滞留』、湯浅博雄監訳、未来社、2000年、5～12ページ所収)。
- Derrida, Jacques, *Sur parole : Instantanés philosophiques*, Éditions de l'aube, 2005. (翻訳、ジャック・デリダ『言葉にのって』、林好雄、森本和夫、本間邦雄訳、筑摩書房、2001年)。
- Frank, Arthur W., *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, University of Chicago Press, 1995. (アーサー・W・フランク『傷ついた物語の語り手 身体・病い・倫理』、鈴木智之訳、ゆみる出版、2002年)
- Herman, Judith Lewis. *Trauma and Recovery*. Basic books, 1992. (翻訳、ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、1996年)。
- North, Joanna. "The 'ideal' of forgiveness: A philosopher's exploration." In Robert D. Enright and Joanna North (eds.). *Exploring Forgiveness*. The University of Wisconsin Press, 1998, pp.15-34.

#### 【日本語文献】

- 小松原織香「赦しについての哲学的研究——修復的司法の視点から」『現代生命哲学研究』大阪府立大学 21 世紀科学研究機構現代生命哲学研究所、第 1 号、pp.25-45、2012 年。
- 萩尾望都『残酷な神が支配する』文庫版、全十巻、小学館、2004～2005 年（連載、小学館『プチフラワー』、1992 年～2001 年）。
- 「まんさいでの萩尾望都のまとめ 3/4」『アキバくんと美人妻』  
<http://beauty-and-akiba.cocolog-nifty.com/blog/2009/02/3-e45d.html>